

農業への努力

その一：用水路の開発と二本樋

昭和五十六年七月五日号

水田に水がほしいという人々の願いは強く、新しい用水路をつくる努力が村々で続けられました。

古郡氏三代の五十年あまりの苦勞と努力によつて「雁堀」が完成してからは、その東・南側の広い地域の村々に、根田堀や上堀・中堀・下堀などの用水路がひかれていきました。

こうした土木工事を行うために、郷土の人達は、和算を学び土地の開発や改良に役立てていったのです。

加島五千石として栄えた陰には、はかり知れない努力があつたのです。

一方、富士山のすその地方にある厚原や伝

法付近も、日照りの害が多く、水が不足して困っていました。

今から八百年程前、山梨県から移り住んだ植松兵庫之介信繼という人は、潤井川から水を引くことを考えました。

そして、巾二畝から五畝、長さ六棧の伝法鷹岡用水をつくつたのです。

途中には、凡夫川という深い沢があります。長さが五十畝もある木で作つた掛どい二本で用水を渡すことに成功しました。これが二本樋です。それからは水を奪いあう「水あらし」もなくなり、この用水路に沿つて厚原、伝法などの村々は発展していったのです。

都市化はすすんでも…

樋代官の子孫 植松卓穂さん

樋代官といわれた最後の人がら数えて私が四代目になります。でも代々直系でないため昔のことはあまり伝承されていません。

これから都市化がすすむほど用水路の役割も変わって来ると思いますが昔の人々の努力の遺産として残しておきたいですね。



凡夫川にかかる二本樋